

〔表紙写真解説〕

表紙写真は鶴見町下梶寄地区にある長宗我部神社である。神社は下梶寄地区を降りて行くと海岸の駐車場の東側に位置し、ブロック造りの塀に囲まれた小さな祠がある。

四国の土佐・阿波・讃岐・伊予に君臨した長宗我部氏（長曾我部とも）が慶長六年（一六〇二）に滅亡し、家臣はそれぞれ四散したが、その中でこの地に流れついた長宗我部氏の武將を祭っているとされている。

祭神 長宗我部氏の武將（名前は不明）

鳥居 明神鳥居（セメント） 昭和三〇年再建

祭日 旧暦の一月二十八日と六月二十八日の年二回

梶寄浦に宮守がいた時代は、宮守に祝詞をあげてもらっていたが、現在は宮守がいなくなり、地域の人たちで般若心経をあげ、お接待を持ち寄りお籠もりをしている。

地区には土佐路姓が多いことから、土佐の国から渡って来たことがわかる。

長宗我部氏は中世土佐の武士から戦国大名に発展した豪族。関ヶ原の戦いでは西軍に属して没落（写真は『鶴見町の文化財』、資料は『鶴見町誌』などを引用）。（矢野）

地名のルーツ

◆最勝海

誤解といえば、面白い例がある。上浦町の最勝海（ニナメ）という地名がある。ここは明治の初めに蒲戸・福泊・長田・夏井の四浦が合併したもので、そのさい地区の新地名が必要となった。

そこで「豊後国志」の穂門郷の起源を語る最勝海藻の地名説話を借用して最勝海としたまではよかったが、この最勝海藻に保都米（ホツメ）という読みがついているのを誤って你那米（ニナメ）と書写した写本を採用したため、最勝海をニナメと読んでしまったっている。

ついにながら穂門郷（ホトノサト）の名はいまに保戸島にその名残があり、蒲戸（カマト）も古くはホトと読んだらしい。ただ風土記が語る最勝海藻起源説話はこじつけであり、ホトとはもともと女陰のことである。その形状からホトは火口や入り江の奥などに転用されて地名となっている例が多く、穂門郷もまた入り江の多い県南リアス式海岸の郷名に採用されてもおかしくはない。それにしても、古人はまことににおおらかだったものである。

（梅木秀徳著「大分の地名」）